序章　いつもと違うプロローグ　（とあるヴァンパイアのプロフィールより）

名前　白虎（パイフー）ほか、偽名多数。
性別　男性
出身地　不明（推定　東洋系アメリカ人　ベトナム戦争の脱走兵　逃亡時およそ26歳）
生年月日　不明（カトリック系孤児院出身　出生届なし　）
血液型　ヴァンパイアウィルス『ZERO』に感染。以後は不明。（変貌前はAB型）
身長　およそ192cm
体重　95kg前後
瞳の色　黒
頭髪　短めの黒

記録　1968年　上官を殺害して逃亡（当時の名は、マイケル・ヤン）
1971年　香港（大中華帝国返還前）に現れる。この頃、吸血妖魔に変貌か？
198X年　日本・沖縄県米軍基地に現れる。パイフーと名乗りだす。
199X年　アメリカ合衆国にて一個小隊を一人で殲滅。
200X年　アジア各国で多数目撃。
201X年　ヨーロッパ各地で目撃。（しかし、逃走を許す）
20XX年　日本某所から、土御門　鬼武（つちみかどおにたけ）を拉致。
20XX年　『法務省特殊機動隊首都ブロック』を、一人で殲滅。
（死傷者・合計98名）

20XX年・・・日本・長崎県軍艦島メディアドームに現れる。

脅威1　あらゆる格闘技・あらゆる言語に精通している。
（得意な武器はジャックナイフ。魔導術の使用を確認。）
脅威2　吸血妖魔でありながら、昼間も活動する。日光に強い。
脅威3　恐るべき生命力。（切断された手足を、瞬時に再生。）
脅威4　驚くべき身体能力。

特徴　胸部から腹部にかけて、白い虎の刺青。

奴は、おぞましい怪物である　20XX　10　10　法務省特殊機動隊　妖魔研究班

第1章　その男、メチャ凶悪。

「いよぅ、石井長官・・待ちくたびれたぜ・・・」
その大男は、馴れ馴れしく私に微笑みかけた。
・・某月某日の21時。場所は、高級ホテルの地下一階にある、薄暗い高級バー。
貸し切り状態なのだろう、他の客はおろか、バーテンダーさえ居なかった。
「この前は、おたくの可愛い恋人・由真ちゃんに、お世話になった。改めて礼を言う・・・」
バーの椅子に腰かけて、偽善的な笑顔であいさつしてきた。こちらは、警戒心バリバリ。
この男のような、恐ろしい妖魔を狩る任務に、私は就いている。崇高な使命を果たすため、日夜努力を続けている。こんな『ならず者妖魔』に、負けるわけにはいかない。
私の名は、石井　久。職業・法務省機動隊長官。通称・『鬼長官』
「凶悪妖魔パイフー・・・先月、彼女を誘拐したのは貴様らであろう？」
「だーかーらぁー、きちんと返してあげたじゃないの。身代金も取らず、傷ひとつも付けないで・・・その短い時間で、俺たちと由真ちゃんは、お友達になったのよ。意外かな？」
「由真がお人好しなのは、今に始まったことではない・・」
真っ白い大虎を擬人化したような男は、一目でわかる高価な紫色のスーツを着ていた。胸に同じ

紫色の大輪の薔薇を挿し、黒いシャツにノーネクタイ。ものすごく派手だ。
　逆に私は、いつも着慣れている、ダークグレーの作業用スーツ・・・
「・・・何処のどいつのコーディネートかは知らねぇが、なかなか、良いセンスしているじゃねぇか？その生地、英国産かな？」
　ギロリ・・・大きな黒い目で、私を値踏みするように睨み付けた。
「そんなことは、どうでもいい・・・」
　私はサングラスを外し、自慢の人工眼球『万霊眼』で、睨み返した。
　このアイテムは、凡人を超人にする素晴らしい物だ。装着すれば、誰もが霊能力者になれる。そして・・・組織の頂点に立つ私は、『黄金の万霊眼』を、装着している。
「何故、貴様のような凶悪妖魔が、このホテルに居る？」
「実を言うと・・・」
　大虎は舌なめずりしながら、答えた。
「このセレブなホテル『フェニックス』のオーナーが、とあるロシアンマフィアの信仰者であり、スポンサーなの・・・知らなかっただろう？」
　ヘラヘラした表情こそしているが・・・その目は、ぜんぜん笑っていない。いいや、殺意さえ感じ取れる。
「・・・嘘じゃないだろうな？その話・・・」
　用心しながら、適当な椅子に腰かけた。
「まっ、俺たちもそのマフィアのねーちゃんに、お仕事させてもらっている。だから、向こうからの謝礼がわりに、宿泊させてもらっている訳さ・・・」
　奴の言葉が終わらないうちに、誰も居ないバーの奥から、謎の美青年が現れた。
　東洋系の美しすぎる青年・・・短めの黒髪。ほっそりとした体形。私の恋人と同じくらいに、白くて滑らかな肌。こちらは、黒い薔薇を擬人化したようだ。黒いスーツ、黒のシャツ、黒のネクタイ・・・全身を黒に統一している。
　キュコキュコキュコ・・ポンッ・・・青年は無言でワインの瓶を取り、コルクを開けた。
「サンキュー、黒猫ちゃん・・・」
　深緑色した瓶を取ると、そのまま口を付けた。
　ゴキュゴキュゴキュ・・・世界中の妖魔の天敵であろう、この私を前に、奴は美味しそうにワインを飲む・・・イライラしながら、私は奴を観察した。
　この男は、三年前に法務省特殊機動隊の首都ブロックを、たった一人で襲撃して、多数の死傷者を出した怪物だ。早い話、我々の仇でもある。
　いつでも奴と闘えるよう、こちらも注意しているが・・こう見えてなかなか隙が無い。私と奴とは、少しだけ距離がある。背が高く、逞しい身体付きをした奴は、あらゆる戦闘の達人だ。こちらも、隙を見せてはいけない。緊迫した空気が、私たちを包む・・・
「うーん、生き返った・・・」
　中身が半分以上残っているはずの、ワインの瓶を持ち直して、改めて私を見た。
「法務省特殊機動隊・第97代目・石井長官。就任後わずか三年で、東京都心部に巣くっていた妖魔たちを、壊滅寸前にまで追いやった。で、現在の東京には、俺さまたちみたいな、度胸のある妖魔だけが居座っているわけで・・・」
「安心しろ、今すぐ貴様も排除してやる。」
　言葉を遮られた大虎は、一瞬、ポカンとした。
「・・・お兄さん、それ、本気？」
　ブォン・・・大虎は、ものすごく素晴らしい笑顔で、重たい瓶を投げつけた。
「・・・・」
　とっさに瓶を避けなければ、顔面に直撃していたであろう。別に怖くないが・・
「・・・惜しい、外した・・・」
　喜々として、大げさなポーズをとった。
「その割には、清々しい笑顔だな？」
　両手のこぶしを握り締めて、怒りを抑えるのが精いっぱいだ。
「おいおい・・・さっきから黙っていれば、お前、ずいぶんと偉そうだぞ？」
　突然、奴の隣に居た美青年が、私の前にしゃしゃり出た。
「誰のおかげで今の地位につけた？誰が先代の長官を56してやった？すべて、俺のパイフーくん

のおかげだろう？彼が居なければ、お前なんか地方都市のしがない次官に過ぎなかったのに・・・ありがたいと思うなら、今すぐ俺たちに頭を垂れてつくばえ！それから平伏しろ！バカヤロウ！」
「まーまーまー、鬼武ちゃん・・・落ち着いてよ・・・」
　気の強そうな美青年・・・名前は、オニタケと言うらしい。優雅な容貌の割には、少々、お育ちが悪そうだ。
　フフン・・・パイフーは、鼻で私を嘲笑った
「彼はこう見えて、良い所のおボンボンだった。ただ、彼の親父殿が、一族の権力闘争に負けちゃって、ちょいと、悲惨な環境で成人したのさ。」
　ぴく・・・一瞬、私はひるんでしまった。
「彼の育ちが悪い訳じゃないさ・・・分かったか？愚か者の石井ちゃん・・・」
　思考が読める？まさか・・・どうせ、私を・・・
「56す気？・・誰が誰を？」
　　まずい、思考が読まれている？
「・・・貴様のくそったれ思考が読めて、何かまずい？」
「くそぉ・・・」
　過去に九州の妖魔たちを、恐怖のどん底に陥れた元バトルジャンキーを・・ヴァカにするな！！
「おっと、動くな・・・左足首にくくりつけている隠しナイフ、今は出さない方がいいじゃない？」
　何故だ？次々と私の行動を予測してくる！？
「長いスラックス穿いているからって、バレていないと思うなよ？それより、貴様のくされ一人称なんか、どうでもいい・・・」
　鬼武をなだめながら、奴は、こう言い放った。
「それよりもさぁ・・恋人の山田由真ちゃん、ものすごくピュアだよな？機動隊のような残忍な組織に、所属しているとは思えないぜ・・・」
　　ブチッ！！
　・・・ついに、私の心の導火線が、着火した。
「何が言いたくて私を呼びだした！？」
　椅子から立ち上がり、正面から奴らを睨む。
「一隊員を誘拐したり、組織のボスを呼びだしたり・・・特殊機動隊を舐めるな！！」
「それは、俺さまのセリフだよぉ・・・」
　奴も、ゆっくりと椅子から降りた。
「・・今夜、貴様に意見しに来てやった・・」
　いよいよ、本格的な殺意のオーラーが、漂い始めた。
「俺はよぅ・・ベトナム戦争で合衆国【ステイツ】を見限った。何故なら・・あいつ等には、正義なんてなかったからだ。世界平和を言い訳に、戦争とは無関係だったベトナム民間人まで、虐殺したあいつ等に・・」
　胸ポケットに挿した紫色の薔薇を、これ見よがしに引き抜いた。
「意味なく殺された民間人の中には、由真ちゃんみたいな、罪も穢れもない乙女たちが数多くいた。今の俺には、白人系のくされ上官に隠れて、暴力の限りを尽くした、頭がおポンチなソルジャーどもと、貴様等、妖魔差別の特殊機動隊の顔が、重なって見える・・」
「何が言いたい？」
「こないだ、とある奴から依頼を受けて、おたくの由真ちゃんを誘拐した。実は、56しの依頼だったけど・・かつて、俺が助けてやれなかった、ベトナムギャルズと同じくらいに、ピュアで、可愛くて、お人好しでさぁ、とてもじゃないが・・」
　少々ためらいながらも、奴は左手で、黒い髪をかき上げた。
「デコピン程度で4にそうな女の子に、俺たちでもひどいことはできない。ぶっちゃけ、56すなんて無理ゲー。だから、依頼主を見殺しにして、由真ちゃんを無傷で返してあげました。」
　・・・ついでに、その依頼人は私と部下とで、始末してやった。
「つーまーりーぃ・・・俺とパイフーは、由真ちゃんを気に入ったの。可愛いし優しいし良い子だし、何より、妖魔を差別しないからな。」
　美形の吸血妖魔までもが、私に意見する。ええい・・ムカつく奴らだ、外道ども！！
「あんだって！？」
　瞬時に、美形妖魔がキレた。

しまった・・また、思考が読まれた！！
「そりゃどーも・・・その差別思考、この黒猫ちゃんにも丸わかりだぜ？」
大虎はゆっくりと間をつめて、手にした薔薇を見せつけた。
「いつもは使わない思考術で、貴様のハートをダダ読みしているが・・・・その差別思考、優しい由真ちゃんが知れば、泣いちゃうだろうな？」
ギンッ！！・・・ここで、奴は真顔になった。
「貴様に、あの子はふさわしくない。」
ぐしゃっ！！・・・私の目の前で、紫の薔薇を握りつぶした。
「あの子の人生に暗い影落とすなら、絶対に貴様をブチ56す・・」
それは、今まで見たこともない、真剣な『殺意』であった。生半可な返答では、本当に食い殺されそうだ。
「これが俺たちのジャッジだ。可愛い子を手放したくない気持ち、理解するが・・・」
すうっ・・・奴は大きく呼吸をすると、死刑宣告でもするように、ゆっくりと言い切った。
「なぁ？俺たちの両手も、貴様の両手も、ヒトや妖魔の血でいっぱい汚れている。罪深い貴様のせいで、あの子が何かに巻き込まれたら、どうする気だ？下手すれば4んじゃうぜ？」
「・・人食い虎に言われるまでもない・・私が由真を守り抜いてみせる。」
じっとり、額に汗がにじむ・・・
「貴様・・この俺から、絶対に目をそらさないのは、さすがだが・・」
ベロリ・・・また、大虎が舌なめずりした。
「そのお綺麗なお顔と甘いセリフで、無垢なあの子をたぶらかしているのでは？あの子、そこいらの偽善的で、傲慢なおねーちゃんとは違うぜ？」
「そこいらの恋愛ゲームに慣れている、顔だけ綺麗な男どもと、一緒にしないでもらいたい。私にも、譲れないものがある。」
人食い虎の目の奥に、私の顔が映る。くそぅ・・臆してなるモノか！！
奴の牙と殺意が、今にも、喉に食い込みそうだ。
「・・・やれるものなら、やってみろ。」
わざと静かに、言い返した。
「大人しく食い殺されるほど、私は根性なしではない。これでも『鬼長官』と言われる男だ・・・黙って4んでやるものか。」
意外？とでも言いたげな表情で、もう一度私を値踏みした。
「何？この俺さまを退治できるとでも？本気か？」
「パイフーの言う通りにすれば？あの子に『慰安婦【いあんふ】』なんて差別用語、似合わない。」
美形妖魔もまた、氷のように冷たい目で、私を睨んだ。

第2章　　お留守番由真ちゃんの独り言・・・

いきなりですが、場面、変わります・・ども・・山田由真です。職業・いあんふです。
いあんふと聞くと、なんだか、暗くて嫌なイメージがありますよね？でも、私は違います。世界一カッコイイ石井さま専属の、おバカで明るい、いあんふなのです！！それで、たった一人だけの慰安部隊に所属しています！！
・・・あはっ！！言っちゃった・・・
私と石井さまは、相思相愛の仲です。始まりは、私の片想いでした。ですが、愛する石井さまに告白したその直後・・・押し倒されて・・・あの方から、好きだって言われて・・・そのまま・・・
キャー！！・・・恥ずかしいから・・・これ以上言えないですぅ・・・
そして、周りの反対を押し切るような人事異動で、私、晴れて石井さま付きのいあんふに、任命されたのでした！！
もちろん、宿命のライバルである橋本次官（♂）を筆頭に、石井さまに恋い焦がれる方々が、組織の内外にたくさん居ます。彼ら彼女らは、ドジでのろまな私以上に、美形だったり、有能だったりします。
それでも・・・貧乳・幼児体形・その上おヴァカな私が、大好きだって、あの方は言ってくださいます。毎日言ってくださいます。嘘でも嬉しいお言葉です。
法務省特殊機動隊の中で、一番成績が悪かった私。妖獣・川餓鬼に指噛まれて泣いちゃった

り、GOKIBURIに襲われて気絶したり、ハブ茶を『蛇のハブのお茶』だと、嘘情報を信じたり・・・時々、周囲から『どん底までドジ』と言われます。それでも、石井さまは私を愛していると・・・
キャー！！嬉しすぎて萌え死にそうですぅ！！
　さて・・・お話は変わります・・・先月のある日、私は吸血妖魔・パイフーさんと、その綺麗な恋人の鬼武さんに、誘拐されてしまいました。あうあうあう・・ドジですね。
　なんでも、パイフーさんは三年前に、機動隊首都ブロックの秘密基地を、たったお一人で壊滅させたお方ですから・・・第一印象は、恐怖でした。
　でも、実はおふたり、素敵なゲイカップルさんでありました。それに、話してみると、とても面白くて、おしゃべりで・・・特に、パイフーさんは博学な方でした。
　お別れした二週間後も、何故か、ガラケーから買い替えたスマホに、あちら側からアクセスしてきて、うっかり、LINE交換しちゃいました。（石井さま、ごめんなさい・・・）
　で、本日・・・パイフーさんからLINE電話で、美味しい情報をいただきました。

『由真ちゃん、おひさー・・・あのよー、俺のビジネス仲間が経営するホテルでよー、今、飲茶バイキングやっているのよー💛**後から石井ちゃんも来るからさー、俺たちで先に食べようぜ？場所は何と、あのセレブなホテル「フェニックス」だよん！！**』
「嘘！？あそこはお金持ちしか宿泊できないはずじゃ・・・」
『フフフ・・・実はね、パイフーが由真ちゃんと石井のために、お部屋をキープしているの。秘密公務員にはあまりなじみのない、デラックス・スイートルームだぜ？』
「えええええっ！！それって、長官から許可取りましたか？」
『とっくの昔にゲットしたぜ？な、パイフー💛』
『マジマジ、先にスイートで待っていなよ。後から石井ちゃんも来るからさー・・・』

**　と、言われて、私たちは昼間に飲茶しました。**

**　それから数時間・・・・パイフーさんたちから、今は石井さまと楽しくお話していると、LINEが来て、ただいまお部屋でお留守番・・・・**
**　石井さまへの飲茶土産に、可愛らしいパンダまんじゅう、用意しています。時間はもうすぐ、22時・・・眠たくないけど、退屈です。**
**　ふかふかベッドは、クイーンサイズ。いくつものお部屋が連なる、素敵なスイート。**
**　バスルームは広々と、壁の絵も、テーブルも、花瓶も、その他の調度品も素晴らしく・・・まるで、美術館に居るみたい。**
**　でも、ふかふかのベッドに一人でいるのは、寂しい・・・**早く帰ってこないかなぁ？
　・・・・はふっ・・・・
　山田由真、25歳。今夜も大人しく、お留守番です。

　第3章　　『誠意』を試すモンスター・・

　俺の名は、パイフー・・・自分で言うのもあれだけど、凶悪で凶暴なモンスターだ。
　今、俺たちの前には、妖魔たちの宿敵が居る。奴の名は『石井　久』ギラギラした人工眼球で俺を睨み付ける、嫌な男だ。
　どういう環境で育ったか知らないが、こいつは、俺たち妖魔を軽蔑し、排除し、殲滅しようと目論んでいる。こいつが主張するユートピアとは、『まったく妖魔の居ない世界』だろう。何処の漫画家の妄想だよ？
　そんな下衆ナチ〇以下の差別男に、何故か、可憐な女の子が恋人兼いあんふとして、くっついているから・・・世の中は分からない。
　彼女・・山田由真は、こいつと同じ法務省特殊機動隊に、所属している。
　出来の良すぎるこいつと正反対に、ドジでのろまな由真ちゃんは、極悪非道な組織内では、ただのお荷物に過ぎない。事実・・・GOKIBURIにすら勝てないこの子に、凶悪妖魔を倒せるわけがない。しかも、俺の冗談を真に受けて、『蛇のハブでお茶を作ろう』とした、壮絶純情なお嬢ちゃんだ。世界遺産に登録してもいい。俺が推薦するからな。
　で、問題は・・空前絶後の人たらし・石井長官。
　俺たちの推測だと、超が付くほどお人好しな由真ちゃんを、言葉巧みに誘惑して、無理やり、肉

体関係に持ち込んだのであろう。とにかく・・こいつ、顔が綺麗なのよ。
　この手の女の子は、綺麗な言葉の上澄みだけで、たいがいの男を信じてしまう。それが嘘でも罠でも関係なく、ヴァカみたいに信じ込む。そして、顔だけ綺麗な男どもは、いとも簡単に、口説き落とした女の子たちを騙し、弄んだ挙句、捨ててしまう。
　妖魔差別の上に、人たらしの女たらしときたものだ。こいつ、最悪。
　この手のヴァカに『愛』なんか、ない。
「・・本気であの子を愛しているなら、あの子の幸せを望むなら、潔く身を引いたらどうだ？石井ちゃん？」
　返答次第では、俺は、由真ちゃんの人生からこいつを『永久排除』しようと決めていた。腹黒い石井に、彼女を幸せにできるはずがない。
　俺も、後には引けない。
「あの子には、温かいお日さまの当たる世界が、向いている。日本国屈指の差別部隊・特殊機動隊の、ドス黒い思想に染まらなかったのが奇跡だよな？」
「・・それは同感だ。」
「それなら話が早い・・あの子の健全な未来には、貴様も、俺も、必要ない・・」
「否・・・私の使命には、やはり彼女が必要だ。」
「言うじゃないか・・く〇偽善者・・」
　バチバチバチ・・凶悪な男どもの、無限とも思える睨み合い。
「どうせ貴様も、口先だけで愛だの恋だの語っているだけだろう？貴様みたいな根性なしに限って、平気でヒトを、部下を、そして恋人を裏切る・・最悪だよな？」
「凶悪妖魔からそこまで言われるとは、私も舐められたな？」
「合衆国には、貴様と同じ嘘つき悪党が、山ほど居たぜ。」
「私が悪党だから、なんだって？それくらいの自覚ならある。」
　こいつ・・この人食い大虎を前に、一歩も引かない。なかなか度胸があるようだ。
「舐めているのは貴様じゃない？」
　思わず、俺も牙を出す・・・
「・・おいおっさん・・パイフーがキレたら、俺も止められないからな・・」
　石井に聞こえるように言い放つと、黒猫・鬼武くんは安全地帯に避難した。
「貴様の言いたいことは、私なりに理解している。たしかに・・・ピュアな由真に腹黒い私など、ふさわしくないだろう・・だが・・」
　少し頬を紅潮させて、奴は堂々と言い返した。
「たとえ貴様の言う通りでも、私は由真を離さない！！離せない！！」
　プチッ・・ついに、俺さまの導火線に火が付いた。
「ふざけんじゃねーぞ！！食い殺されたいか！？貴様ぁ！！」
「あの子の居ない人生ならば、私は一秒でも生きていられない！！たとえ、貴様に何を言われても、だ！！」
「俺さまの大嫌いな綺麗ごとを言うな！！口先だけなら、何とでも言えるよなぁ！？」
「こんな命で良かったら、今すぐ私を56せばいい！！」
　俺の目を睨み返す黄金の人工眼球に、恐怖も、よどみも、なかった。
「もとよりこの命、いつ失ってもかまわない。一人の男として、正々堂々、潔く4んでみせる！！」
　まずい・・・こいつ本気で『死』を覚悟している。
　普通、俺みたいな怖いキャラから、食い殺すとか何とか脅されたら、だいたいのイケメンキャラなら、逃げるかビビるか命乞いするはずなのだが？
「大人しく4んでくれないくせに、まぁ・・・」
　・・・意外と、根性あるじゃない？この男・・・それは、由真ちゃんへの愛に対する、こいつなりの『誠意』なんだろうなぁ・・・
　普通、人間は自分が一番可愛い。だから、口先だけの男は、愛とか恋とかお前が欲しいとか言う割に、危機的状況下では、あっさり、恋人を捨てる。こいつもそうだと思っていたが・・・
「・・まぁ、お互いに由真ちゃんから嫌われなければ、良いか？」
　いよいよ・・・俺が長官殺しを決意したそのとき、意外過ぎる展開が待っていた！？

　最終章　　必殺！？夜の飲茶タイム！！

・・・で、物語は、いよいよクライマックスを迎えようとしている・・・
ここからは、作者の従妹さまに当たる『菫青琥珀お姉さま』の素晴らしいリクエストによって、この鬼武が担当する。つまり、一人称の大トリだ。
俺が人間だった頃・・12歳からだいたい18歳ぐらいまで・・リッチなおっさん相手の男娼をしていた。で、今はすべてを捨てたヴァンパイアだ。
俺を地獄から救い出してくれたのは、他ならぬパイフーだ。禍々しい彼を一目見るなり、激しすぎる恋をした。出会ったその日に愛し合った。そこから、俺が欲しかったもの、全部、手に入れた。すべて、パイフーの力によって・・・
自由になった俺は、ちゃんとした吸血妖魔となり、パイフーと世界中を旅してまわった。
・・・たまさか、俺たちが日本に寄り道したとき、ツチミカド何とかという男から、由真ちゃん56しの依頼を受けた。
しかし、依頼主から聞いた話と、実際の由真ちゃんのギャップに、俺たちは唖然とした。妖魔56し地獄の差別組織に、所属しているはずなのに、俺たち妖魔に敵意は抱かなかった。
むしろ・・・

『キャー、パイフーさんって、博学ですね！！すごいですぅ！！』

敵意の無さにもほどがあるくらいの、ド天然キャラだった。
彼女の素直さと明るさが、逆に、パイフーを心配させた。極悪非道な彼でさえ、この手の天然ちゃんは・・56せない。
由真ちゃんの笑顔を見て、人間だった頃、合衆国から守れなかったベトナムねーちゃんたちを、思い出し、『悪党の石井から救い出す！！』って、きかないのよ！！このヴァカは！！
・・・まぁ、俺も同感だけど・・・

俺的には、石井なんて死のうが生きようが、どうでもいい。だが、御三家の箱庭国家日本にて、妖魔56しの本家本元・法務省特殊機動隊の大ボスを倒すには、今夜はリスクがでかすぎる。

パイフーが石井を仕留めた後で、復讐に燃える機動隊の雑魚に追い回されるのは、マジでヤバイ。雑魚とは言え、相当に訓練された戦士たちだ。こちらも無傷では済まないだろう。
それに、可愛い由真ちゃんが泣くのを、俺は見たくない・・・おっと、この物語の主人公は、その『可愛い山田由真ちゃん』であることを、うっかり忘れるとこでした・・・

デラックス・スイートルームのチャイムを鳴らすと、そこには、石井以上のイケメンで、パイフー以上の極悪人・毒師の等々力薫が、セクシーな笑顔でドアを開けてくれた。
「おこんばんは、鬼武くん！！」
パイフーも知らない作戦のために、俺が呼んだ特別ゲスト。俺より短い黒髪の薫は、まるでトリカブトを擬人化したようなクール・ビューティー。56しもメイクも、お手のモノ・・
「どーだ？猛毒野郎カオルップ・・プリンセス・由真のお支度は？」
「オッケー、オッケー・・・素材がいいから、ものすごく綺麗になったよ💛」
言われて、俺も部屋を覗き込む・・・
「おーっ、いっつ、びゅーてぃふぉー💚」
器用貧乏の薫の手によって、いつも以上に可憐になった主人公は、お部屋の奥で、恥ずかしそうにもじもじしていた・・・って、メチャクチャ可愛いじゃん！！
「・・この子、最前線に送りこんだら、世界中の戦争が止まるわ・・」
思わず余計なことを呟いた・・・

俺の今夜の目的は、『パイフーが石井56すのを阻止する』ことだ。先ほど説明した通り、石井を56すにはリスクがある。それを回避したいだけ・・

それから数分後・・俺は変身した由真ちゃんと、夜の飲茶隊たちを連れて、パイフーたちの居る地下のバーへ戻った。
そっとドアを開けて確認する・・壮絶怖いバトルなシーンが始まるような、殺伐とした雰囲気だ。睨み合うパイフーとヴァカは、激突寸前であった。
猛毒野郎カオルップの話だと、石井はものすごくお強いそうで・・・まぁ、それだけの実力と度胸なくしては、一人でパイフーと対峙できないだろう。さすが長官職に就く男、まったく侮れない・・鬼長

官と言うあだ名も、どうやら伊達ではなさそうだ。

　すぅっ・・・大きく息を吸って・・吐いて・・はい、突入！！

「はーい、そこまで！！」
　大きくドアを開いて、俺と愉快な飲茶隊が、バトルな二人を無理やり止めた！！

「「なっ？？？」」

　ビビるバトルジャンキーどもを前に、飲茶隊が速攻で夜の『飲茶タイム』の準備を始めた。
「悪いが・・ここでバトルされては、逃走経路に俺が困る。だから、今から平和的に飲茶タイムとしゃれこまないか？」
「「・・・・・」」
　シリアスな空気を、一気にシリアルに変える離れ業・・・うんうん、パイフーの呆れ顔が、たまらない！！
「お一っと、石井ちゃん。俺たちを排除するのは、お茶した後にしてくれないかな？でないと、せっかくお化粧した可愛い由真ちゃんが、ぴいぴい泣いちゃうぞぉ・・・」
　俺のセリフを合図に、おせっかいな猛毒野郎が、ヒロインの背中を押した！！
　パッ！！・・・薄暗かったバーの灯りを最大限に明るくして、キラキラで飛び切り可愛くなった由真ちゃんを、ライトアップした。

「ふ・・ふぁあっ・・恥ずかしいですぅ・・・」

　瞬間・・・パイフーも石井も、息を飲んだ・・・
　いつもは三つ編みの髪を、チャイニーズなダブルお団子ヘアーにした。で、幼児体形ながらも身体にフィットした、ピンクの半そでチャイナドレスで、可愛らしく決めている。
「ドレスの刺しゅうは金糸で牡丹の模様！！足に転倒防止の低くて赤いチャイナシューズ！！メイクはナチュラルだけどアジアン風！！アイシャドーは控えめに！！メイクから衣装チェンジまで、かかった時間はわずか30分！！余った時間で薄ピンクのネイルまでやっちゃいました！！参ったか！？」
「いよっ！！さすが器用貧乏等々力ぃ！！」
　パチパチパチ・・調子に乗って、俺、拍手。
　一方・・・白い猛虎と鬼長官は、可憐すぎる慰安婦ちゃんを、バカみたいにガン見した。
「ちなみに、ドレスの代金は石井ちゃんに請求するそうです。」
　さらりと請求先をバラす、嫌な俺さま黒にゃんこさま・・
「お久しぶりです、石井さん。この前はご依頼ありがとうございました💛」
「ど・・ど・・毒師・・殿？」
　鬼長官・石井が、目をパチクリさせて、超驚いている・・・いい気味だ。
「鬼武くんから依頼が来たのが、一週間前。ドレスはミシンで縫いました。あっ・・刺しゅうは全部、僕の手作業ですけど☆」
「・・・・」
　器用貧乏の無駄な神業に、石頭の長官は絶句した。
「そ・・それより・・あ・・あの・・・い・・石井・・さま・・」
　マジで照れる由真ちゃん、飲茶隊のひとりから、そっとお皿を受け取った。
「石井さま・・・いいえ、石井長官・・・パンダまんじゅう、食べませんか？」
　頬を赤く染めた由真ちゃんは、ホカホカ湯気が立つパンダまんじゅうを、恥ずかしそうに石井に勧めた。
「とっても美味しいです・・どうぞ・・」
　彼女の目を見て、俺はハッキリ分かった。この子は、間違いなく外道・石井にマジ惚れしている・・可哀想だけど、パイフーの目論見は、泡と消えるだろう。
　ほっこりした笑顔は、まさに天使で・・・パイフーと石井の二人が、この子を気に入るのも、なんとなく分かる・・・こうなると、さすがの俺でもヤキモチ妬けないなぁ。
「蒸したてで温かいですよぉ💚」
　世界一貧弱な『いあんふ』は、世にも恐ろしい鬼長官のハートを、鷲掴みにしていた。
「あ・・ありがとう・・・」
　ドギマギしながら、石井がまんじゅうを手にしようとした、そのとき・・・

「え～い、貴様になんかにもったいない！！この俺さまが食う！！」
　言うが早いか、パイフーがホカホカのまんじゅうを、まるっと全部、横取りした。
「うん、美味い！！この味、最高！！」
　瞬間、鬼長官がマジでキレた。
「こ・・この妖魔・・・排除してやるぞ！！」
「あっかんべー！！貴様みたいなヴァカは、埼玉県の草でも食っとけっ！！」
「極悪吸血妖魔め！！今すぐこの場で退治してやるっ！！」
「落ち着いてください！！まだ、おまんじゅうはありますからぁ～・・・」
「あ～・・・ドレスのお代金・・・」
　逃げ出すパイフー、追いかける石井、慌てる由真ちゃん、どうでもいい薫・・・なんか、まぬけなコントみたいだけど・・・
　バトル回避は大成功💚ふぅ・・疲れた・・

　とにもかくにも・・・器用貧乏の手でドレスアップした由真ちゃんのおかげで、しばらく平和的に遊べそうだ。これも、日光にメチャ強いZEROウィスルのおかげかな？
「さて・・・明日は何処へ行こうかな？」
　東京のガイドブックを片手に、次なる観光地をチョイスする、黒猫なのでした💛

番外編、意味なく終わる！！